

## 平成二十六年年度秋期南奥駢(抖擻)修行

実施日 平成二十六年十月二十五日(土)～二十九日(水)

参加者 今野孝祐 椎木 堯

南奥駢修行、平成十七年より毎年九月に単独で行っていたが、一昨年から桜本坊の奥駢けで知り合った宮城県岩沼市の羽黒修行者、今野孝祐との同行修行となった。例年体育の日に併せて行っていたが、今年には小生の都合で日程を変更させて頂いた。幸い天気予報ではこの間の天気は大きな崩れも無いとのこと。当初の予定通り実行していたら台風十九号の直撃を受けていたことから、日程変更も吉兆の表れと勝手に解釈、準備万端奥駢修行に向かう。

### 第一日目 十月二十五日

朝六時過ぎ自宅を出て、一路吉野に向かう。

例年だと、大阪に前泊、大和上市駅から前鬼口に向かう一日二便のバスの内、正午過ぎに前鬼口着のバスを利用してはいたのだが、過日、前鬼小仲坊へ宿泊のお願いの電話をした際、五鬼助義之様から、十月一日のバスダイヤ改正により、バスは一日一便、前鬼口に十八時半頃に到着する便のみになったとのこと。

愕然とするも、五鬼助様より前鬼口に迎えに行くとの申し出に計画通り奥駢行を実行することとするも、スタートから他力に甘えながらの修行、自戒しながらの修行となってしまった。

前夜の夜行バスで出発された今野氏と吉野で落ち合うこととし、十一時前吉野に到着、今野氏と連絡を取り合くと、今野氏は水分神社に参拝中、桜本坊で落ち合うこととし、蔵王堂から東南院、勝手神社とお参りしながら桜本坊に向かうと偶然にも桜本坊の門前で下ってくる今野氏とばったり出会い、共に桜本坊に参拝、巽良仁院主と談笑後、吉野をゆっ

くり散策、大和上市駅に向かうが、紅葉の季節を迎えようとしている吉野の参拝客は少なく妙に閑散としていた。

短い秋の日差しの下、大和上市駅で行者装束に着替え、一日一便のバスで前鬼に向かう。すっかり日も暮れ前鬼口に到着、出迎への五鬼助様の車にて小仲坊へ、道中カモシカがお出迎え、車道に佇み、車が数メートルに近づくと逃げずこちらの様子を窺っていた。このように至近距離で見るのは始めて、カモシカは鹿と異なり牛科であるためおっとりしているのかも。十九時小仲坊に到着。

本日は二十二名の団体の他数名の宿泊者があるとのことであったが、皆早くも床につかれていますのか山小屋は電気も消えひっそりとしていた。我々も行者堂の前では静かに勤行後、早速にお風呂並びに夕食を頂くも五鬼助様夫婦と二十一時近くまで談笑、明日に備え床に就く。

コースタイム

自宅 6:10 → 広島駅発 7:18 → 吉野着 10:52 → 上市駅発 16:25 → 18:28 →

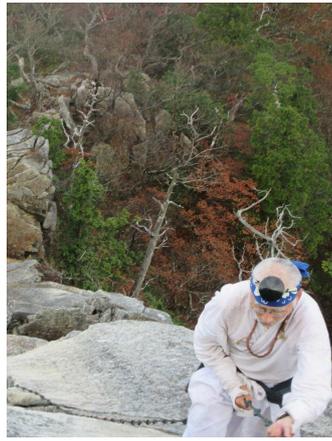
小仲坊着 19:00

### 第二日目 十月二十六日

本来なら遅くとも五時には出立の予定であったが、団体客の食事が五時とのこと、その時間に併せて朝食を済ませ、五時二十分行者堂での勤行を済ませ小仲坊を出立。鹿の甲高い鳴き声を耳に太古の辻を目指してひたすら登る。両童子岩に着いた頃にはあたりはすっかり明るくなり、清々しい夜明けであったが、身体は妙に重い。今日に備え八月中旬から毎朝、八キロのコースを軽いジョギングを交えながらのウォーキングと少しは身体を鍛えていたつもりであったがその効果は余り現れてこない。例年だと前日の前鬼へ向かう林道並びに裏行場への行で汗とともに溜まった世俗の汚れを流し、心身共に軽くなってくるのだが、今回はそれがなないため、今世俗の汚れが溢れ出ているのである。

太古の辻到着後早々にリュックを降ろし、大日岳を目指す。何時もな

がら少々緊張しながらの大日岳の鎖場、いつもは今野氏が先導、小生は後から登るが、今回は小生が先導、釈迦ヶ岳を横目に無事到達、柔和な顔立ちの大日如来像前にて勤行、奥駈・峰中の安全と無事満行を祈るも、この大日如来像に手を合せるとより大きな力を頂いた気持ちになる。この大日如来像、釈迦ヶ岳の釈迦如来像と同じく吉野の強力、鬼雅こと岡田雅行が大正末期に一人で担ぎ上げたとのことである。



大日岳の鎖場

大日岳山頂

大日岳登拝後、太古の辻に戻ると、昨夜小仲坊で同宿であった団体十二名が休憩を終え、持経の宿を目指し出立するところである。

聞けば本日は持経の宿まで奥駈道を縦走、今夜は「きなりの湯」で身体を休め、明日は行仙の宿より再び奥駈道を南に向け目指すとのこと。

彼らの後を追いつながら蘇莫岳へ、この左手のピークには以前瀧本昭太郎氏が見つけた「大峰前鬼坊大天狗」と書かれた三角石があり、その前で勤行、休む間もなく南に向かい歩を早める。

南奥駈は北のような巻き道は少なく、石楠花岳と般若岳以外は全て山頂を越えなければならぬ。また般若岳も山頂に靡きがあるため、結果として登拝することとなる。

本日は、絶好の秋晴れで、尾根道は実に爽快であったが、出立が遅いなか、大日岳に登拝したため持経の宿に到達したのは十三時半過ぎ。

このまま行けば行仙宿到着時には日も暮れているだろうと思うも、新

宮山彦ぐるーぷによる行仙宿での接待は無用と川島代表にお願いしていることもあり、先を急ぐ必要も無いと勤行後ゆっくり休憩を取る。

勤行時、不動堂の戸を開けると、山彦ぐるーぷから我々にと蜜柑が置いてある。昨年この場所で事故死された方の追悼式が昨日行われたとのことから、その際置いて下さったものと、相変わらぬ心遣いに感謝しながら有り難く頂戴する。

平治の宿を過ぎ、転法輪岳に向かう途中、テント設営中の中年の登山客一人に出会う聞けば吉野から那智山を目指しているとのこと、一人でも多くの登山客にこの南奥駈道を歩いてもらいたいものである。

初めて小生が南奥駈を歩かせて頂いた十年前頃には証誠無漏岳からの下りや、転法輪岳を過ぎ、俱利伽羅岳に向かう最後の下りあたりは、道の両側からスダケが覆い被さっており、山彦ぐるーぷにより拓かれる前の南奥駈の往時が偲ばれたが、今はその竹も枯れその面影はない。しかし、よく見ると少しではあるが、ササの新芽が芽吹いている。峰中のササが茂っていないと山彦ぐるーぷの刈峰行の苦勞を偲ぶことは出来ない。ササの復活を密かに望むのは小生だけであろうか。

俱利伽羅岳の最後の鎖を登った左手のピークには昨年沖崎様が「金剛童子」と書かれた石を見つけられ奉ってあるが、今回は登拝すること無く、俱利伽羅岳山頂から遙拝させて頂き、先を急ぐこととした。

重い足を引きずりながら怒田の宿に着いた頃には日も沈み、あたりは薄暗くなっていたが、夜道は暮れないものと怒田の宿、行仙岳で勤行後、ゆっくりと行仙の宿山小屋へと向かうも、疲れた足での夜道は実に心許なく、躓きながらやつの思いで山小屋に到着。

今夜の泊まりは我々だけであろうと思いつつ、山小屋の内から明かりがもれている。戸を開けると人の姿が、「一人ですか」と声を掛けると、「シイノキさん」との川島様の声に思わずビックリ、ここでこの宿泊をお願いする際、メールで接待は無用とお願いしており、全くの想定外、驚くやら戸惑うやらであったが、行者堂での勤行後、再会を懐

かしみながらも川島様のご厚意に甘え、水汲みも中止。

川島様の手料理に舌鼓、峰中の禁酒の誓いも犯し缶ビールまで頂戴、話は尽きないが明日を思い九時過ぎ就寝。

コースタイム

起床 4:00・出立 5:20→西童子岩 6:25→太古の辻 7:20→大日岳→太古の辻 8:20→天狗山 9:15→般若岳 10:40 乾光門 11:20→阿須迦利岳 13:10→持経宿 13:35→平治宿 14:45→俱利伽羅岳 15:55→怒田宿 17:00→行仙岳 17:25→行仙宿山小屋 18:05



26日・怒田ノ宿



27日・行仙宿・行者堂を出立

### 第三日 十月二十七日

程よいビールの酔いに疲れも伴い夢心地の夜半、突然の雨と度重なる落雷の音に何度か目を覚ましたためか、三時頃に一度時計を見るも、まだ少し早いと二度寝をしたのが失敗、再び目を覚ましたのは五時、慌てて起きるも少々寝過ぎしてしまった。川島様は一晚中暖を取るためストープに薪を足しておられた様子、今野氏と小生は少々疲れも伴って気が緩んでいたのか、三人とも寝過ぎしてしまった。川島様差し入れのちらし寿司と昨夜のおかずで朝食を頂き、行者堂で勤行後、川島様に見送られ六時過ぎ行仙宿山小屋を出立。

今回も山彦ぐるーぷに助けられながらの行となってしまった。思えば

この山小屋で玉岡様と初めて出会って以来、順峰、逆峰を問わず何時も山彦の皆様のお世話になってきた。行者にも成り切れない自分が恥ずかしく、皆様に申し訳ない思いが胸を過ぎる。

昨夜来の雨も上がり、霧のなかを笠捨山へと向かうが、毎度のことながら、笠捨山の登りは辛い、息も絶え絶えに山頂にたどり着き勤行後辺りを見渡すも、大峰の山々は霧の中、何も見えない、何時もだと北には昨日辿った峯々が見渡せ、感慨にふけるところであるが、今日は先を急ぐこととする。

高圧線の鉄塔の側を巻き、槍・地藏へと急ぐ。地藏岳の上り下りの鎖場は少々緊張するが、この登拝は南奥駈の楽しみの一ヶ所である。

しかし、地藏岳山頂付近の痩せ尾根が少々気懸かりである。次第に細くなっており、何れここを通れなくなる日が訪れるのではなからうか。因みに昨夏参加した東南院の奥駈では、地藏岳山頂は通らず、高圧線の鉄塔辺りから電源開発の巡視路を巻き道として四阿の宿を目指したが、地藏岳を横目に歩く奥駈は寂しい限りであった。

今朝の出立が遅れたため、今回は宝冠の森は無理だろうと思いつながら振り返し、香精山、貝吹野、如意宝珠岳等での勤行を重ね蜘蛛の口に着いたのは十二時半、当初の行程表より一時間以上遅いが、急げば宝冠の森に行けるかもしれない。期待を胸に先を急ぐと、何故か足がとても軽く、いつもは辛い玉置山山頂へと向かうかつえ坂も苦も無く通過。

玉置山山頂並びに玉置神社での勤行後社務所に到着したのは十五時過ぎ、受付も早々に宝冠の森へと向かう。

宝冠の森は玉置山の行場の一つとされ護摩もたかれる場所と聞いており、時間さえ許せば必ず訪れる場所である。しかし最近ばかり訪れる人もいないのか、宝冠の森に置かれている碑伝は新しいものが一枚、古いものが三枚あるのみであった。因みに東南院の奥駈でも以前はこの森で護摩を焚いていたが、行仙からの峰中一泊していた上葛川の民宿が利用できなくなってからは、行程上、ここへは訪れなくなったという。寂

しい限りである。

暗くなるまでに宿坊に戻らねば先を急ぐも、宝冠の森への往復のアップダウンは結構辛い。以前は片道四十分程度であったが、今は寄る年波か小一時間かかってしまう。



笠捨山頂



蜘蛛ノ口



宝冠の森

この玉置神社での宿泊、奥駈開始当初は電話一本の予約でOKであったが、いつからか登山計画書の提出に基づき参籠許可書が送られてきていた。今春からは山行計画書とともに誓約書の提出も求められ、少々窮屈な思いもあるが、玉置山参籠所の利用が叶わなければ南奥駈での修行は困難を極め、泊めて頂けるだけでも有り難いものである。

コースタイム

起床5:00・出立6:15→笠捨山7:40→地藏岳8:55→四阿宿9:40→香精山10:35→貝吹野11:05→蜘蛛の口12:25→花折塚13:50→玉置丁14:40→玉置神社15:05・参籠所発15:25→宝冠の森16:15→参籠所17:05

#### 第四日目 十月二十八日

四時起床、手持ちのパンで簡単に朝食、夕食と弁当は用意出来ないとの神社からの連絡があり、参籠所での食事は朝食のみ、その朝食を昨夕頂戴し、今朝は手持ちのパンを朝食としたのである。

神前での勤行後五時前に出立、空を見上げれば満天の星空、頭上にオリオンが輝いている。冷たい風が吹き抜けてはいるものの、本日は好天と昨日着用していた登山用タイツもはかず、白衣、山袴の下は速乾性の半袖のシャツにパンツといったいつもの夏の出で立ちで出立。

水呑金剛分岐に着いた頃には足下も明るくなり、奥駈道を右にそれて踏み跡を頼りに迷うことも無く無事水呑金剛に到着、勤行する。



水呑金剛



篠尾辻

再び奥駈道に戻り、大森山山頂を目指して登拝し始めた頃には鮮やかな朝焼けのなか、気分も爽快、気力に満ちていたが、大森山に取り付いた頃から次第に西からの冷たい風が強くなり、山頂に向かうにつれ強風が容赦無く我々を襲ってくる。何時もなら何度もあえぎ、立ち止まりながら山頂を目指す、今回は余りの寒さに手足の感覚も麻痺し震えながらの登頂に疲れさえ感じる、余裕も無く気がつけば山頂、余りの寒さに勤行すら満足に出来ない。

尾根筋を急ぐ。早く雨具か何かを羽織らなければ低体温症でダウンしてしまうのではとの思いが頭を過ぎるも、風を遮るような場所は無く、もうそろそろ限界ではとの弱気な気持ちも頭を過ぎっていた頃、先を行く今野氏が突然に尾根筋の東側斜面の窪地を指差し、そこで雨具を着用しようとする、二の返事で同意し、装束を整えることとしたが、手足の

震えにザックからの雨具の取り出しも着用も思うに任せない。難儀をしながらやつの思いで雨具を羽織るも、ファスナーの上げ下げもままならず、今野氏に助けられ何とか装束を整え、一息つくことが出来た。

雨も降らない晴天の山で遭難するなどシャレにもならないと冗談を言いながら大森山を下るも、半ば夢遊病者の如くで、なかなか身体が温まってこない。今野氏は大森山を下る最中雨具を脱ぐも、小生は五大尊岳南峰の下りの日だまりでやつと雨具を手放すことが出来た。

南奥駈けは順峰、逆峰と併せて十三回目であるが、十月下旬の入峰は初めて、山を侮ってはいけないという貴重な体験をさせて頂いた。

金剛多和、大黒天神岳、山在峠、吹越の宿と順調に勤行後十四時過ぎには七越峰に到達、勤行しようと鳥居の先を見ると、今春ここに置き忘れた見覚えのある念珠が懸けてある。

昨秋、太古の辻直下の登りで転倒、数メートル滑落した際、錫杖を紛失、いくら探しても見つからなかった場所で、一昨日今野氏が九字の秘法を唱え、再度錫杖を探してみたが、見つけることは出来なかった。その御利益がこの七越峰で現れたものと大いに喜ぶ。

七越峰から右側に熊野川を見下ろしながら備崎に向かうも、川は濁り、水量も多いように見える。案の定河原に降りると、川は増水、とても渡河出来るような水量では無い。諦めて備崎橋を渡り、大斎原を経て熊野本宮大社へと向かう。重い足で辿る備崎橋からの国道、電光掲示板にはダム放水中との表示。

昨秋の奥駈では、台風の余波で山在峠辺りから雨が降り出し次第に激しくなってきたが、熊野川はまだ増水しておらず、無事渡河出来ただけに今回は好天にも係わらず渡河出来なかったことが少々心残りである。

熊野大社側のB&Bほんぐうに立ち寄り、ザックを降ろして熊野本宮大社へ参拝、無事勤行を終え、「峰中安全」で「無事満行」出来たことを神前に報告。

熊野本宮大社での勤行を持って今回の修行も無事終了、しかし、今夜

の宿泊地湯の峰温泉へは、必ず大日越えで向かうこととしており、疲れした足を引きずりながら湯の峰温泉に着いた頃には辺りは薄く暗く、時計は十七時を大きく回っていた



備崎・熊野川増水



本宮大社 満行！

湯の峰温泉では満行を祝して直会の名のもと、杯を重ねることとしていたが、食事を終えて部屋に戻って早々、今野氏は寝入ってしまった。

小生の奥駈けはここで終わりであるが、今野氏は明日から三日間の予定で高野山を目指して小辺路を歩く計画、明日は果無越えで十津川温泉、二日目は三浦越え、伯母子越えで一気到大股を目指す計画。

早々に睡眠を取り鋭気を養ってもらわねばと思い、一人寂しく酒を飲み就寝。

コースタイム

起床 4:00・ 出立 4:55→玉置辻 5:45→水呑金剛 6:05→大森山 7:20→五  
大尊岳 8:50→金剛多和 10:45→大黒天神岳 11:15→吹越宿 13:05→七越峰  
14:10→熊野本宮大社 15:40→大日越 16:30→湯の峰温泉着 17:25

### 第五日 十月二十九日

奥駈けの習慣か四時に目が覚める。お互いゆっくり温泉につかった後、出立の準備。小生は六時二十二分のバスで田辺駅へ、今野氏は七時過ぎ

のバスで本宮へ向かう予定。

バス停で今回の満行と今野氏の小辺路無事完歩を願って固い握手を交わし、五日間の交誼に別れを告げた。

次回の奥駈けは来春、例年通り熊野三山巡拝後、大峰山寺の戸開け式に併せて順峰修行を行うこととしている。

この奥駈修行については、一昨年の春、順峰修行に同行させて頂いた福岡県柳川市「千乗院」住職・吉開賢淳氏から、来春我々の日程に合わせ「熊野大峰順峰七十五摩奥駈修行四十周年記念」と銘打って順峰修行を予定しているので一緒に如何かとの有り難いお誘いがあり、二つ返事で了解したばかりである。

山を下りると、峰中での苦しみや、辛きは全て忘れて、満足感に浸りながら次回に思いを馳せている自分。来春に備え体力、気力の充実に努めなければと新たな決意のもと、午後には無事帰宅。

家族の誰よりも先に迎え抱きついてくる愛犬（甲斐犬・大真乃黒桜姫）の歓待を受け、しばしの異空間の世界から現世に立ち戻っていた。

コースタイム

起床 4:00・出発 6:10↓紀伊田辺駅 8:00↓新大阪 10:50↓広島 12:26↓  
帰宅 13:05

(記 椎木)